

三河 アララギ

2026年 令和8年2月 如月
きさらぎ

二 月 号

第七十三巻 第二号

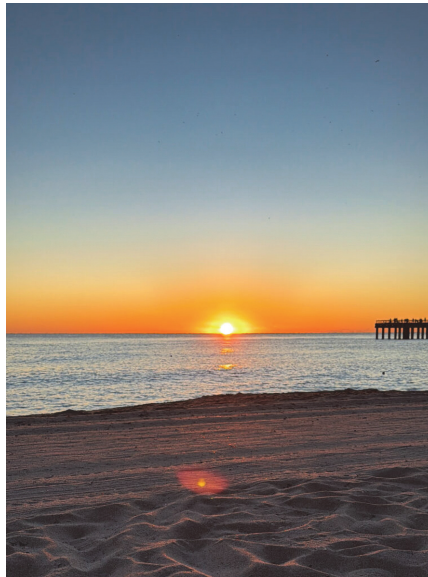


ニューヨーク日記(232) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

GOOD MORNING 2026

Blue Shoe Diaries



あけましておめでとうございます、2026年。初日の出！ って特別に気持ちいいよね。マイアミで珍しく肌寒い朝だったけど起きてビーチまで行って良かった！ 太陽に「おはよう！」と挨拶するところから始めるのが、やっぱりしっくりくる。この日の出、水彩でも描いてみたけれど…来年にはここに載せられるくらい上達してるかな。新しい趣味にチャレンジ！ 色使うの難し～

Happy 2026! This was the first sunrise of the year, and what a beautiful one. It was unusually cold in Miami that morning, but I'm glad I bundled up and made it out to the beach. Watching the first sunrise is a Japanese tradition, and to me, it just feels like the right way to start the year—by greeting the sun. I even tried painting it in watercolor... maybe by next year I'll be good enough to share it here. We'll see. Here's to a new year that's a little calmer, a little happier, and a lot healthier for everyone.

目次

第七十三卷第二号(通巻八六六号)

表紙・パラグワイの動物画	(1)	牧原 正枝	(27)	今泉 由利	(33)
ニューヨーク日記(232)	Blue Shoe(2)	森 厚子	(27)	木 風	(34)
歌集 わが冬葵	御津 磯夫(4)	水野 絹子	(28)	折々の詩(二十四)	ふじのけんじ(36)
歌集「草々」	今泉 米子(5)	牧原 規恵	(28)	五感を澄ませば(44)	杉浦恵美子(38)
ははきくさⅢ	大須賀寿恵(6)	大武 智子	(29)	附録(四十四)	矢崎 直人(40)
三河アララギ歌集Ⅲ	夏目 勝弘(7)	現代学生百人一首	東洋大学	『寒梅に思う』	中屋 保之(42)
『歌集 八千代』	岡本八千代(8)	栗原 勇哲	(30)	『酔いの徒然』(166)	丸山酔宵子(44)
地球を	今泉 由利(10)	柳沢 諒	(30)	「今は二月 早春の探し物／遙か遠い国から吹いてきた」	高橋 育郎(46)
友	安藤 和代(12)	高橋 仁寛	(30)	絹の話(4)	今泉 雅勝(48)
ホームの朝	清澤 範子(14)	加藤 大地	(30)	初狩便り51	花野みふり(50)
柿の木	山口千恵子(16)	宇井 朋希	(31)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬	
共通点	杉浦恵美子(18)	若狭いおり	(31)		
巳の年「2025」	伊藤 忠男(20)	佐藤 翼海	(21)		
新社務所	白井 信昭(22)	渡辺恵美里	(31)	康鍼治療院	玄 翁 (54)
埼玉のうつどーん！	矢崎 直人(24)	植村 公女	(32)	丘の上客舎の楼台に登る	殿山 木風(56)
『いとよせ』 いーはとぎ		木村 歩歩	(32)	Circles of Time	Atiya Hussain(58)
稲吉 友江(26)		今泉 如雲	(32)	編集室だより	今泉 由利(60)
鈴木美耶子(26)		矢崎 直人(33)		「三河アララギ」について	(62)

歌集 わが冬葵

御 津 磯 夫

水をおほひて若きみどりの限りなし紅ふくよかなるは浅岸にたつ

こもりつつ母のいませる臺町の家をめぐりて雲の上の花

作りたる言葉拙しさわさわに噴水ふきあげ白く水の上に散る

赤き葉の朱の鶏頭の一束は莖曲りをり朝の水にさす

秋草の鉢に水そそぐときのまもわれをめぐりて藪蚊跳梁やぶかてうりやう

三河の味噌三百匁と讀むことも過ぎにし人のおもかげとする

注文しおきて忘れし古語拾遺絶版を知らず病み臥す床に

旱草(ひでりぐさ)の穂にいでて立つ根は強し踏まるる草はなほ強しも

三十年のまへの苦しき食などをいまは誇るがごとく言ひ合ふ

暑き日はことさら難しきむづかを撰りて讀むわがならはしもそらごととなる

歌集「草々」

今 泉 米 子

藪なして茗荷のしげりはびこれりわれの呆くるを諾ふごとく

芝たけて立つ一夜茸白々しまたぎまたぎて芥すてにゆく

外來患者のしばしとだえし午後るとき山鳩なくを憎しみてをり

部屋すみに包み積みおく「ははきくさ」米國議會圖書館より注文が來ぬ

また二人のこりて夕べの卓にをり蛙しづまりくつわ蟲なく

夕餉さへ手間のかからぬもの食べてそれより本の讀めるでもない

巨いなる時代となりてわが庭の百日紅の咲かなくなりぬ

剪りて使ふこともせざればわが庭の葉蘭垣なす三十米

濱木綿の梗の倒れてつやつやの珠の實庭のみちをはばみぬ

ブルーマウンテン呑みていで來し渚には腐れる波の打ち寄せてゐる

はゝきくさⅢ

大須賀寿恵

支柱よりも高く伸びたる胡瓜の蔓まつはりたわみゆれつつ止まず

いくたびも眼鏡外して球を拭くめがねの球の曇るでもなく

ものみなが幾重にもみえてゆらぐなりスモンはわが眼を冒しはじめぬ

書くことも読むこともみなあきらめて只々横になりて眠らぬ

いつの日か痛みとともに全盲になる日の来るかスモンを病めば

伸しても曲げても足の痛む朝蟬鳴くこゑのしばしとぎるる

立葵の朱の花巨きく咲き出でぬ台風十三号近づく朝に

いさかひて帰り来れば胡桃の実割れて白根を出だしてゐたり

かな蛇の仔は竹の葉にまるまりて息づき見ゆる朝光の中

反対のための反対するとき吾が子とをりて雨しきりなり

三河アララギ歌集Ⅲ

夏目勝弘

はつかなる時間も惜しと焦りたつ命短き現はれならぬ

朝かげに鏡に白し募りくる不満を抑ふる己を見つむ

土間の隅の拔葉見てゐて何事も思ひてはをらぬ己に気付く

池水に音して跳ねたる時のまの鯉の昂ぶり我は知りたし

痺れたる足の痺れは上りきぬそして膝より出でてゆきたり

くれなゐのリングを割りぬひつそりと先の尖れる種の黒さよ

知らぬまに下を向きつつ歩みゐる舗装の道に拾ふものなし

喜びのまた寂しさの思ひもなく過ぎゆく今日も一日と思ふ

今の我にゆとりはひたすら眠ること眠りにも追はるる夢多くして

舗装路の黒きになほも黒々と拉がれし形に蛇の油のこる

『歌集 八千代』

蒲郡 岡本八千代

寿福寺の墓地を巡りぬ椎の葉の春の落ち葉の散りくる路を

沈丁花の花匂ひきぬ尼將軍政子の墓をのぞき見るとき

十葉の花に雨降りドクダミの花はま白父のいま亡く

病む父の痩せてゆく日も学校にわれは怠らず勤めてゐたり

父ひとり粥を啜るを止めさせきわがいふことを父は聴きにき

女教師を嫌へる生徒ひとりある三年E組の担任となる

桜の実熟れたる桜の木の下を今朝は早々補習授業にゆく

われの立つ教壇の位置より少ばかり渥美の海の色見えてゐる

隣町の西浦中学よりひと抱への薔薇の花われに届けられたり

幾冊の読まむ本など出だし置く歎異抄も枕辺に広げたるまま

研究課題諸帳簿提出は月曜日まで黒板に赤字で書かれてありぬ

梔子の花咲く季のめぐりきて父の一周忌迅しま近し

虫がつくと嘆きゐたりし父のことば昨日のごとしクチナシの咲く

入院してその日に父は胃を切りぬ庭の梔子の花を見ざりき

思ひ出づることはことごとく父のことこの夜しきりに耳鳴りのして

地球を

東京 今泉 由利

138億年の前に出来たという宇宙にありて地球の春を

信号を待つ間の太陽光線のこの熱量を全身に受く

長い長い宇宙の歴史に連なりて最新百年その内にをり

人類を地球に生きるその程を計算してをり終りに向けて

生きている如何に生くるかしつかりと見定めゆかむ自身のことを

南半球へ行きにしことよ四十五日間大きな船に乗りてをりき

地球なる赤道を越え南半球へ海面に浮ぶ布袋葵に水色の花

少しづつ月は毎日に円くなりただそれだけのそれだけが良し

キンポウゲ科の白色の花心しんに紫色を蓮花升麻の神々しさよ

父と母とに伝へるためにはるばると太平洋にのりだしゆきぬ

父と母に私の経験伝ふためおのが範囲を越えてゆきたり

地球軸の反対側へとゆきゆきぬそしてアルゼンチン国に辿り着きたり

満月が地球の影にかくるるをこのほの暗さにやすらぎにつつ

いつもいつも地球単位に遠く住む由野と一緒にいるこの日々を

かすかなり聞こえるものそら耳かエンジェルトランプットの白い花

友

豊川 安藤 和代

入居して早一年の過ぎんとす多くの友に支えられて

「おはようー!」と食事に誘ってくれし友今日はピンクのセーター似合う

「寒いネ」と互いに言いて味噌汁に体温めて今日を始むる

冬の陽の淡く射し込む友の部屋干し物揺れて小さき幸せ

半分個ひとつの菓子に分け合えば友はますます親友となる

吾が歩調合わせて散歩してくる友いて今日の陽射しは暖し

見て聞いて触れて感じて詠む短歌友には勝てぬ口唇をかむ

ガーベラを窓辺に飾り春よ来い病いし友の全快祈る

言わずとも私の好物知っている友の土産は幸せの味

年だけを重ねれば「良」と言うでなくそれに相応し友は最高

無口なれどどこか温かき友のいてエレベーターで会える楽しみ

友と見しあの夏の日の遠花火今眼裏に鮮やかに浮く

荒らげな友の言葉は胸痛く「やさしき婆」になると誓う夜

「おやすみなさい」どこか淋しきその言葉明日があるから頑張れている

指先程も幸せ等は望まねど友と迎うる正月嬉し

ホームの朝

春日井 清澤 範子

ホームの朝はるかに空を眺めつつ老人6人のテーブルにつく

新聞の広告欄に目を通し食卓の朝ひときわにぎわい

腰弱くなりゆくおかめひよつとこと頭揃う朝の朝食

リハビリをすませ心も体もほぐれたり先生は額に汗にじませており

我が家族娘と吾の二人なり願うは娘の思いやりなり

ベツトには娘の思い多くして顔合わせながら笑顔まんまる

老人の施設なりけり吾はまた娘に感謝

柿の木

豊川 山口千恵子

親指の爪いためつつ殻をむく銀杏ご飯明日の朝餉は

大木の屋敷の隅の柿の木に柿の実鈴生り今年は成り年

屋敷隅の柿の実みごとに成りをりぬ熊出づる地の人々思ふ

鈴成りの大きな柿の実渋柿なり皮むきてつるす軒の日向に

いつの代に植ゑられし木かこの柿の木尋ねてみたき人すべてなき人

息子来て高枝鋏操りて大木に成る柿とりくれし

スーパ―の自動のレジに戸惑ひつつ機械に向ひ料金払ふ

玉葱の苗を植ゑたる屋敷畑冬の陽暖か朝見て立つ

新しく建ちたる家のそれぞれの屋根には光るソーラーパネル

知らぬまに建ちたる家の四軒はそれぞれ新しきデザインの家

土埃り大きく立てつつ大型の機械にて大豆の収穫してゐる

ブルーシート敷き揚げ干すわが畑よりの大豆幾何

乾きたる大豆の莢よりころころところげ出でくる豆粒幾百

冬の陽に揚げ干しゐる大豆の色その温もりを触りて楽し

わがとりし大豆干しつつ思ひをり母の作りし呉汁のつぶつぶ

共通点

蒲郡 杉浦恵美子

弟が突然訪ねて来ると云ふこの年の瀬の忙しきときに

弟の訪問時には我は留守家の裏敷停めて待つとぞ

我が帰宅待ちたる弟裏敷のクルマの中よりのつそり出でぬ

近況を語らふうちにいつしかに我ら幼時の父母の思ひ出

この家に我と弟のみありて夜のしじまに父母の思ひ出

共感の方が多くも我々が抱きし父母への想ひはそれぞれ

弟の父の思ひ出哀しくも父の思ひは擦れ違ひけり

弟は干渉厭へる性分ぞあゝこんなとこ我もおんなじ

せつかちとゆつたり性格異なれど干渉厭ふはおそらく共通

朝ごはんなににてもよし昔から手間のかからぬ弟なりき

きしめんの昼食共に摂りし後弟西に帰りて行きぬ

この次に会ふのはいつか弟はいともあつさり別れて行きぬ

訃報知りふと思ひ出づ海老名さん大須演芸場に向かふ姿を

存続の危機なる大須演芸場海老名さん知りて支へに来たり

海老名さん老ひの身なれど演芸の小屋存続に大須訪ひしか

巳の年「2025」

大阪 伊藤 忠 男

あれやこれ行きつ戻りつ巳の年や思ひ出いかにか何かありしか

何やこの今年の暑さ目に余る今も残りしトラウマなりや

ニユースネタ途切れず流す故意なりや上書き重ね読む暇もなし

スマホ手に書きては消して年暮れぬよぎる思いやかの国の影

駆け抜ける打ちて凄きや投げて勝つ記録に残る名場面なり

大屋根のリングを守る知恵無くて今年の遺産までも消えゆく

暮らす日々追われ円安身にしみるなす術なきや懐寒し

トクリユウに信という文字奪われてスマホすらさへ遠ざけるなり

地下鉄に乗るやチラシを見る主婦に厳し世相を垣間見るなり

「核を持つ…」耳を疑うひと言に「悲劇は二度と…」の誓い忘るか

体面にこだわりまるで子の喧嘩鹿もパンダも口開けたまま

朝焼けに映えてあからむさわらびの燃ゆる心に爽やかな風

雨ゆゑか冬至ゆゑかな暮れ急ぐ寅の刻にて闇夜なるらむ

見違える孫の一年思わずや会ふなり目線上向きにけり

歳重ね時は速くて道遠くあれよあれよと年過ぎにけり

新社務所

豊川 白井 信昭

スーパーの駐車場一処^{ひとところ}皇帝ダリア今を盛りと

み社の玉垣の道砂止めの豆板据えき遠い想い出

建て替わる新たな社務所玉垣に豆板一並び砂止め効くのか

今の年も松の幾本境内に枯れ果てしこと先を案じる

木枯らしの吹き荒^{すさ}ぶわが角口に菊花^{あお}煽^{あお}らるひもすがらにして

荒風に菊くくり了^おえて一夜さを庇^{ひさし}鳴らす音真近に聞こゆ

ようやくに基礎なる下地整えて残りし材に型枠作れり

一本の単管支柱位置決めて今年最後の十五夜の月

土留垣アララギ根元裂け目より土と石入れボール持て突く

朝よりは行楽日和と晴れ渡り家族五人の蜜相^{たりみかんが}狩り行く

ここよりはいつか来た道行きつけて今現われ清田^{せいだ}の大楠^{おおくす}

ゆつくり上る一段一段我と妻気遣い合いつ小粒もぎ取る

土留垣梢枯れ来しシマヒイラギ再びにして新たな芽生え

緑葉に白く縁取る斑入葉師走にあまた蘇りたり

石垣のシマヒイラギ花真近にもベランダに見ゆ今を盛りと

埼玉のうどん！

埼玉 矢崎 直人

新都心『武蔵野うどん専門店 ところ井』は店内製麺所あり

鴻巣の『長木屋』川幅彩^{いろどり}うどん^{うどん}で荒川風景描く

二回目の武蔵野うどん『澤村』で期間限定メニューを頼む

隣接のパチンコ屋さんの駐車場車を停めてうどん有田に

ぷりぷりのえびの天ぷら「うどん有田」たまごとだしが効いててうまし

幸手まで「自家製うどんもりた」行く店の周辺ぐるぐるまわる

豆乳ベース不思議な味の幸手うどん季節限定牡蠣の天ぷら

JR桶川駅の徒歩六分手打ちうどん「いしづか」行列

ホルモンのうどんなんてと思いしも行列並ぶだけの旨さが

一時間並んで食すうどんなかな勤労感謝の振替休日

大宮公園駅から歩いて約六分なす汁うどん「小山屋」に行く

手打ちうどんとなす汁うどんの相性のうまい具合に噛み合っている

埼玉のうどん！スタンプラリーやり六つそろって箸置きもらう

『いっとうよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

木犀の匂へる朝に母逝きぬあなたを越える事なきままに

稲吉友江

百までは頑張るからと言ひし母みごとに生きし九十八歳

参列の隣に座りし長男の白髪見付けて呆然とする

秋深まる中逝ってしまった母。私にとって偉大な母でした。施設でもアイドルでしたね。ありがとう母さん。

息子らはいつしら遠きものとなり二男は今日は一時帰国か

鈴木美耶子

留守宅にジャカルタ土産置きおくと成田離るる息子のメール

西の空たなびく雲の茜色ジャカルタへの機今ごろ何処を

いつまでも母なのか私は。息子から届いたほの一通のメールに心ほのほの。きつと母の顔をしていた事でしょう。

声高の早口なるか受付の若き女性の車検説明

牧原正枝

整備士は低めでゆるりと話さるる軽トラタイヤ減りてゐるらし

軽トラの車検の代車は軽トラと荷台は美しきレンタカーなり

車検の受付説明、整備士説明の様子の違い、代車にレンタカーが用意され、とまどう自分の古い仕度でした。

さういへば明日は会食お日柄は友引とあり好天らしき

森厚子

ひいちゃんは計算機持ちはあちゃんは両手にペン持ち何やら夢中

小春日の朝野ボタンのいくつ咲く通りすがりの先生の庭

ひいちゃんは園児、はあちゃんは一歳と少しです。二人の孫はそれぞれ真剣な面持ちで…。面白く感じました。

くり返しごめんなさいと唱へても母はもう何も応へてくれぬ

水野 絹子

全てかけ愛してくれし母よ母よついてゆくよとつねに言ひしに

本葬の遺影は通夜と入れ替はる孫の手によるおしやれな母に

一人っ子の私に対し、母なりの期待や思いがあつたのだらうと思うと、涙がとめどもなく溢れ出しました。

はからずも四日続きの休日に思ひけるのは娘の元へと

牧原 規恵

八十歳鏡を見ればはつとする大年寄りと呼ぶにふさはし

終活と思へど何も片づかぬ日々の暮らしはなるやうになる

行動範囲の狭くなった今、思いついたのが兵庫県に住む三女の家でした。丁度娘の誕生祝いが出来ました。

歳晩の駅より続く商店街あの店この店シャッター閉ざす

大 武 智 子

膝を病むきみと股関節悪きわれ遥拝所より竹島拝む

六度目のわが干支午年巡り来て左馬の瓶に千両活ける

病を抱えての六度目の午年のお正月。めでたいのがめでたくないのか？とりあえず痛みのないことに感謝を。

現代学生百人一首

東洋大学

五時間も黙って座る日帰りの座禅もどきの修学旅行

慶應義塾普通部1年 栗原 勇哲

気づいたらいつもスマホを触ってる催眠術に僕はかかった

慶應義塾普通部1年 柳沢 諒

もう少し違う関係あの夜のラインに早く気付いていたら

慶應義塾普通部2年 高橋 仁寛

まじやばいガチでえぐいわそれは草スパイのような僕らの会話

慶應義塾普通部3年 加藤 大地

「行ってきます」「行つてらっしゃい」それだけで私は今日もがんばれるんだ

法政大学第二中学校2年 宇井 朋希

塾帰り空のスクリーン茜色そつとスマホをリュックに入れる

横浜市立南戸塚中学校3年 若狭 いおり

マスクして少し曇った声だっというさ想いを告げられるのなら

東京学館新潟高等学校1年 佐藤 翼海

十一年経っても私は帰りたい私の故郷いわきの町へ

東京学館新潟高等学校1年 渡辺 恵美里

『俳句』

七草やスーパで買う寂しさよ

植村公女

母と児の会話弾みし冬の坂
鉛筆を削り揃えて三日かな

小春日のテラスに紅茶パンケーキ

木村歩歩

病窓に詩と紅葉と青空と

枯れ葉落ちじつと手を当て木と話す

停戦の掛け声虚し聖夜かな

凍月に病床の友意識無し

極月やその横丁のもつ鍋屋

今泉如雲

冬風やこの道砂洲の上通る

関八州分限番付空つ風

埼玉のうどん食べ歩く秋

矢崎直人

ホルモンのうどんに並ぶ勤労感謝日

小春日や上尾のうどん有田かな

逝く秋やうどんのつゆを飲み干せり

スタンプリー完成し秋逝けり

父を亡くし母も亡くせり秋深し

今泉由利

月いでて今日の一日の終おしまふを

まんまるの十五夜の日でありました

小さきまま小さき影して初夏日

自らの命のことよ秋うらら

スペイン語にてアルベンティナ冬もあり

陰暦の八月十五日月見とて

今日よりは秋と決まりて安心す

地球上の一つ命とこの夏日

祇園会やニューヨークより間に合ひぬ

病室で小春の青や電話あり

木風

嚙んで食うおもゆのうまさ小春かな

小春富士吟じて患者の笑顔多々

日だまりに北風そよと何故やさし

中天に今年最後の満月が

若者の詠は小春かなごまるる

ドクターのていねいな診たて小春かな

十六夜が一人舞台の師走かな

兄弟の絆深める伊香保の湯

精仁

昇伝の審査終って秋日和

春山

見渡せば枯野を梳と風抜ける

つねこ

今日の月鍋と地酒の名餉かな

ベランダにソメイ吉野の花一輪

しいたけの太き茎き網に焼く
ふかし芋買うてほうばる親子かな

秋風に父からもらった腕時計

半月にへりの光りや夜空かな

靖国で吟練習武道館

暑さ遅ぎ十月末に衣替え

鳥越の神輿をかつぐ勇ましさ

年老いて階段のぼるつらさかな

さびしかな草かれ空家多くなり

流星やべらぼう国宝光るなり

白馬岳三段模様の秋景色

初孫やそろりそろりの乳母車

チェンバロの音色に聴きいる夜長かな

紀風

孝

折々の詩(二十四)

ふじのけんじ

俺はブロイラー

俺はブロイラーになっちまった

今の俺は おいしいのかな

結構脂肪がついていて 濃い出汁が出るかもね

肝臓はなんてったって自慢さ

だって脂肪肝(フォアグラ)なんだから

ももだって 筋だけじゃなく

適度に 脂が乗っているし

内臓だって ピンク色で

胸はちょっと筋っぽいからダメかな

ササミはいいかもな

やっぱり 俺を味わうなら

レバーだな

サイズも大きいし 可食部分もたくさんあるので
病気しないで 成長すれば
いい肉にはなりそうだな

俺はブロイラーになっちまった
肉体はきれいに食べてくれよな
骨についている手(羽)とかリブも
残さずな

肉体がなくなったら
もう何も残らないのかな
食べられたのなら
食べられた人の中に残らないのかな

栄養として エネルギ―として
でも それよりも ずっと残る何か
俺のいのち

五感を澄ませば（44）

杉浦恵美子

命名の界限

頼まれて名簿を作成していたときのこと。

「絆暖」ちゃんの読み方がわからず依頼主に訊ねると

「『ゆのあ』ちゃん」と。

「なるほど。ではお姉ちゃんの『理暖』ちゃんの方は『りのあ』ちゃん？」

「いいえ、こちらは『りのん』と読みます」

はあ、なんと難読。

けれども名付け親が凝りに凝った命名であることが想像できます。

姉妹を「暖」と云う漢字で揃えたかったのでしょうか。でも呼び方の方は、思いっきり差別化。呼ぶだけだと、関連性は感じられません。妙に感心してしまいました。

反して我が友人の五人姉弟。

長女ひとみ二、三女（双子）ふゆみ・みゆき長男よしき四女さつき。

一見凝った感じはしませんが、実は上から頭文字を読んでいくと「ひ・ふ・み・よ・い」（漢字では五月なので）と、数え方の順番になっているんです。

ところで、この数え方って何だろうと調べてみました。一般的に使われている「いち・に・さん・し」は漢語由来、「ひふみよ」の方は、日本古来の「ひとつ・ふたつ・みつ」と数える大和言葉を略したもので、特に神事などで用いられ、「ひふみ祝詞」の最初にも出て来るとかうーん。奥が深い。

話を戻します。五人姉弟の命名にはさらに仕掛けがあつて、名前三文字の頭か尾が「ひとみふゆみみゆきよしきさつき」と一本の糸のように繋がっているのです。

命名はお父様だそうです、その甲斐あつてか姉弟は大の仲良し。

そういえば我が一族にも命名にまつわるエピソードがあります。

私の上に生後三日で亡くなった兄がいました。祖父が傭んで自分の名前の一字と「幸」を組み合わせて命名。偶然に有名な歌舞伎役者の名前と一緒だったので、家族

で「おじいさんは堅物に見えたのに歌舞伎が好きだったんだらうか」と語っていましたっけ。

ちなみに昔は名付け親は主に母方の祖父だったそうです。

次に生まれたのがこの私。

父は張り切ってあれこれ思案。ところが、父方の祖母が自分が名付けると言っていて聞きません。祖母は名付けの名人だと自負していたふしがあります。親戚の誰それ私の命名と自慢するのをよく聞きましたから。もつとも私には古臭い名前だと感じられました。

父は逆らえず、祖母が名付け親になりました。女の子の命名は祖母の権利という暗黙の了解もあったのかもしれない。

そんな事情も知らず、子供の頃、父に「どうしてこんな平凡な名前にしたの、学校に同名の子が沢山いるのに」と抗議した時に説明してくれました。さらに私が生まれた時祖母に微笑み（えみ＝恵美）かけたから思い付いた名、つまり「あなたは自分で名前を付けたようなもの」と。うまいことを言うものです。

弟の時は、晴れて父は考え抜いた命名をしました。続いて父の兄弟の子供たちの場合。

最初の女の子の名前は有無を言わずおじが付けたからまあ祖母のむくれたこと。不機嫌は暫く続きました。おじもまづいと思ったのか、次の女の子の命名は祖母に譲りました。

気難しかった祖母が名付け親だったお蔭で私の方は依怙臆負された代りに、弟の方は何かと邪険にされ、祖母には未だによい思い出を持っていません。

こんなことも思い出しました。

もう何十年も昔、近くの神社の境内に生まれたばかりの捨て子が。当然身元不明。そこで市長が、姓を神社名、名を生まれた季節と性別を組み合わせて命名。あれからその子はどんな人生を送っているのでしょうか。

命名ひとつにも様々なドラマがありますね。

名付けには大和言葉の複雑さ反映してる我が名を含めて

附 録（四十四）

矢 崎 直 人

埼玉のうどん食べ歩く秋

スタンプラリー完成し秋逝けり

埼玉のうつどーん！スタンプラリーに参加して中央エリアの六軒をめぐりました。オリジナル箸置きをもらいました。どのお店も個性的でおいしいうどんを食べることができました。食べ歩きはじめてやってみましたですが楽しかったです。

新都心『武蔵野うどん専門店 とこ井』は店内製麺所あり

鴻巣の『長木屋』川幅^{いそり}彩^{いろど}うどんどんで荒川風景描く

二回目の武蔵野うどん『澤村』で期間限定メニューを頼む

ぶりぶりのえびの天ぶら「うどん有田」たまごとだしが効いててうまし

JR桶川駅の徒歩六分手打ちうどん「いしづか」行列

ホルモンのうどんなんて思いしも行列並ぶだけの旨さが

一時間並んで食すうどんかな勤労感謝の振替休日

埼玉のうどん！スタンプラリーやり六つそろって箸置きもらう



『寒梅に思う』

中屋保之

「冬来たりなば 春遠からじ」とはいうものの、寒さのピークはこれからだろう。その凍てつく空気を切り裂くように一輪の花。

寒梅

新島 襄

庭上の一寒梅笑つて風雪を侵して開く

争わず又力めず自ら百花の魁を占む

日本の原風景ともいえるこの漢詩が、この時季に相應しい。殺伐としたできごとの多い昨今、一木に凜として開く梅花に、私たちが失いつつある「潔さ」や「気高さ」を思い起こさせてくれる。

厳しい環境のもとでも泰然と、私が… 俺が…などと先を争うこともなく、自然のまま枝先に咲く梅花を、「強さ」と「謙虚さ」の象徴として詠んだとも言われている。夫人の八重は、以前NHK大河ドラマ『八重の桜』で取り上げられた。妻について襄は、彼女は見た目は決して美しくありません。ただ、生き方がハンサムなのです。私に

はそれで十分です」と語ったそうである。

そんな歴史、背景も知らず、私は大学受験をするにあたり、〴〵高校の担任に同志社に行きたい〴〵と希望を出した。が、言下にダメだしされた。曰く〴〵校風がキミとはマッチしない。親元を離れたら何をするかわからん!〴〵。見事に喝破されてしまったのを思い出す。

数年後、社会に出た私は、《笑って風雪を侵して開く》のような心境とは程遠い生活を送ることになる。世の荒波、風雪に頭を抱え、避けながら、争いごとや他人を押しつけてでも前に出ようとする毎日。もつとも、〴〵他人を押しつけてでも〴〵は、些か苦手で、これが出来てりやもう少し…だったかも。

『禍福は糾える縄の如し』とはよく言ったもので、その後の人生於いて良き先輩・友人に恵まれたのは、《争わず又力めず》を悟った(?) からか。実に示唆に富んだ詩と思わずにはいられない。

『庭先の一本の梅の木、寒梅とでも呼ぼうか。風に耐え、雪を忍び、笑っているかの様に、平然と咲いている。別に、争って、無理に一番咲きを競って努力したのでもなく、自然にあらゆる花のさきがけとなったのである。まことに謙虚な姿で、人間もこうありたいものだ。』
　　〴〵新島襄〴〵

この心境に、一歩でも近づきたいと思う。

『酔いの徒然』（二六六）

丸山 酔宵子

『トルコの世界遺産と空中散歩』

12月とは言えまだ昼間は30度を超すカイロを飛び立つて、イスタンブール経由で世界遺産のカップドキアへ。

陽はとつぷりと暮れ、コートなしではいられない。空港からバスでカップドキアの中心地にあるホテルに着くと、眼前には岩山を繰り抜いたお城が聳え立っていて、度胆を抜かれる。更に、宿泊するホテル自体も岩山を繰り抜き、眺めの良いテラスやチャーミングな花壇に囲まれたユニークで豪華なホテルなのだ。

カップドキアは、20もあるトルコの世界遺産の中でも最も人気の高い名勝地。カップドキアの奇岩群は数百万年前の火山活動で噴出した火山灰や溶岩（凝灰石）が広大な大地に降り積もり、雨水や風が歳月をかけて侵蝕。堅い玄武岩の層が柔らかい凝灰石の上に乗ることで、帽子をかぶった「妖精の煙突（Fairy Chimney）」のような独特な形に形成されたのである。

この神秘的な地形の中にある初期キリスト教時代の洞窟教会や洞窟修道院遺跡群は、1985年「ギョレメ国立公園及びカップドキアの岩石遺跡群」として文化遺産と自然遺産両方の条件を満たす世界でも珍しい複合遺産となったのである。

また、驚くなかれ、ここ、カップドキアには「カイマクル巨大洞窟」という神秘的且つロマン溢れる「巨大地下都市」がある。

地下8階から10階に至る巨大な地下施設には、大小様々な部屋、寝室、馬屋、厨房、ワイン醸造所、井戸や地下水供給施設、教会、集会場など日常生活に必要なすべてが岩を削って作られている。通気孔は各階に通じ、地下の最も深い部分でも楽に呼吸することができる構造になっている。一番多い時代では2万人、通常時5千〜8千人の人が住んでいたとの歴史的考察がなされている。

何故、何時頃、このような巨大地下施設を作ったのか、この「謎」は未だ明確には解明されていないが、初期キリスト教時代以前には既に作られていたようで、その後、アラブ人の侵入に対抗するための施設となっていたよう

である。

この巨大地下都市は地元農民によって1963年に偶然発見され、本格的に調査されたのは1965年からと比較的最近のことで、全容が解明されていない古代のロマンなのである。

冷んやりとした洞窟に入って行くと、地元ガイドの案内で注意深く進まないとすぐ道に迷ってしまう。長短さまざまな狭いトンネルが四方八方に広がって、天井が低く、狭い穴倉を通ったり、急階段があったりと、約1時間程度の足腰にかなりの負担のあるツアーではあるが、素晴らしいロマンあふれる体験であることは間違いない。

カッパドキアから西へ600キロメートル。「白い石灰棚」で有名なエーゲ海近くのもう一つの世界遺産のパムッカレに向かう。パムッカレはローマ時代からの温泉地として有名で、炭酸カルシウムが堆積してできた棚田状の温泉で、全長約4キロメートル、高さ200メートルに及び、日中は青空を反射して神秘的で鮮やかな光景を見せてくれる。

勿論、宿泊ホテルでは天然温泉を楽しんだのであるが、

日本とは違いパンツ着用ではある。

この地での最大のイベントは、何といっても、バルーン（気球）での日の出の空中散歩である。12月初旬の寒い夜明け前、防寒具に襟巻をしつかり巻いて、ホテルを出発。でこぼこ道を真つ暗な中を進んでいくと、広大な広場に巨大なバルーンがベチャンコにしぼんだ状態で10数個、横たわっている。全てのバルーンに巨大なバーナーでバルーン内の空気を温め、徐々にバルーンが浮き上がり始めている。いよいよ空に浮き上がれる状況になってくると、太い蔦で編んだ大きな箱状の籠に、約10人が素早く乗り込む。音もなく静かにバルーンは上昇し、いよいよ空中散歩の始まりである。

東の空が明るく陽が刺し始め、「白い石灰棚」が朝日を浴び金色に輝きはじめたのである。

寒空に昇る気球や朝日浴ぶ

酔宵子

今は二月 早春の探し物

高橋育郎

今は二月。けれどもたったそれだけ。辺りには何もない。

何と殺風景なことか。

耳を澄まし、聞こえてくるものの中に春らしいものはないか。

鼻をクンクンさせて、春らしい香りはないか嗅いでいる。

目をこらし、春らしいものはないか探し物をする。

でも何もない。それが二月か。

何もないところから春を迎えて 何もないところから花を咲かすのだ。

二月は三月に爆発させるエネルギーをため込んでいるのだろう。

私たちは、そこに息を合わせて、待ち望んでいるのだ。

そして、花咲く春を歓声上げて、喜び合うのだ。

遠い国から吹いてくる

高橋育郎

遠い国から吹いてくる

ロマンの香り さわやかだ

風は目には見えないけれど 木々の葉揺らし
自由自在に吹き抜けていく

春ならば そよそよ そよ風

レンゲ タンポポ 花盛り

夏ならば 夕暮れ 軒下

風鈴 チリリン チリリンリン

秋ならば 秋風 さわやか

五穀豊穡 お祭り太鼓

冬ならば おお寒む コサム

北風小僧の カンタロウ

ところで そうそう台風だけは 気を付けて

絹の話(4)

「アトリエテレビ」今泉雅勝

絹と美人と健康

絹を着ると美人になるのでしょうか。健康を維持出来るのでしょうか。

誰も一番知りたい事です。先月号(3)の機能性の話をもう少ししてからにしましょう。

絹は僅かに色素を吸収する性質が有る様です。ですから昨今は絹をパウダ化したり、ゲル化して化粧品に多用されています。保湿性、抗菌性、防紫外線性と相まって、肌に優しい親和性があるので、化粧品には実に都合の良い素材です。但し絹のどの部分をどのような粒子の大きさで配合使用しているか企業秘密です。リンスなどでは明示された物が多くあります。髪が紫外線から守られ、しっとりするからです。しかし絹は誰にも万能ではあり

ません。アメリカの学者の発表では20万人に1人位、絹蛋白アレルギーの人がいると言う発表がありました。私も30年の間に2人出会いました。

世間で絹を着るとコラーゲンの回復になると謳う宣伝も有りますが、これは眉つばです。絹はコラーゲンの減少をほんの僅か遅らせるようですが、数値的に捉えた研究は有りません。

絹の下着は肌のかく質除去効果があります。絹の繊維を顕微鏡で見ると、おにぎり型の繊維ですので、極めて細かなヤスリで肌を撫でている事になり、不要になつたかく質層を取り除き、新しい皮膚に潤いを与えてくれます(保湿効果)。絹は一定の湿度が加わるとマイナスイオンを発するので、絹を着るとマイナスイオンに包まれ、ゆつくりと健康維持に役立ちます。

絹には優れた緩衝性と難燃性が有り、燃えても有毒ガスを発しません。絹は防弾チョッキに使われて来たくらいですので、災害に時など物が当たっても怪我などしに

くく傷ができてても化膿止めに顕著な効果があります。傷口に絹の端切を直接当てて、バンドエイドや包帯をしないと早く治癒します。

野蚕絹は家蚕絹に比べていずれの機能性も優れておりますし、広葉樹林を増やす環境保全に寄与しますので、ご愛用をお薦めします。

絹を食べるとアルコール代謝促進、糖尿病予防、便秘予防、痴呆症制御、大腸癌予防等が期待されております（後者3例は実験中）。絹美人とは肌がつやつやで健康なことのようにです。

初狩便り
(51)



花
野
み
ぷ
り





ほたる再生プロジェクト7 カルタ

新米の発送が終わり、一段落した晩秋のある日、初狩小学校から「ありがとう集会」の招待状が届いた。

「四年生のためにホタルのお世話のしかた教えてくださり、ありがとうございました。感謝の気持ちを伝えるために「ありがとう集会」を行います」とあり、「また会いたいです。ぜひ来てください」と四年生の字があった。

十月十九日に内山代表とカワニナの養殖に成功した高橋さんの二人で参加すると、四年生の作ったカルタが披露された。カルタの絵も文も生徒たちが心を込めて作った力作に感動。教室でカルタを並べ、取り合せて遊んだ。

「せ」先生は内山さんと高橋さん「わ」わ「わ」岩からすべって落ちちゃった」「ま」ママの背中に乗るよ（かわにな）」「ゆ」ゆらゆらととんでるホタル」「の」のつて休けい草の上」

内山代表と高橋さんは、四年生から感謝状をもらい、うれしくて泣きそうだったとか、満面の笑顔だったとか。カルタの話を聞いた「笑顔の田んぼ」のメンバーは、なんて良い子たちなのかと、みんな幸せになったとさ。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
<https://hondachiro.exblog.jp/>

2025年12月10日

肌を守る

朝の 5分 で空の色や状態が大きく変わります
日が出たり 月の位置が変わったり・・・

時間的にも 朝の 5分 は大きいですよね笑

今の時期 肌の乾燥 肌のかゆみ 湿疹

などなど 空気の乾燥とともに

肌の問題が出やすくなっています

肌が乾燥すると

皮膚を守る潤い（バリア）がなくなり

普段は大丈夫なことでも問題が出やすくなります

例えば衣服

化学繊維（化繊）などから

バリアのない乾燥した皮膚に問題をおこします

洗濯時に 衣服に柔軟剤を入れずても

問題がおきたりもします

ですので

今大丈夫であっても

ワセリンで予防していきましょ

うち太もも や 足首

は大切に 塗っておくと寒さ予防にもなります

手にも下地として塗っておき

その上からハンドクリームを塗れば

手を洗ってもハンドクリームだけ落ち

菌やウイルスを落とし 手も守れます

その後には 再びハンドクリームをまた塗りましょ

肌からの侵入を防ぎ 身体を守りましょ

今日も笑いながら楽しんで行きましょ

2025年12月19日

身体を大切に

お天道様が出ない朝は

6時でも夜中のような暗さです

ちなみに星も見えたりします

少し前の 本田のひとり言 に

早朝ストレッチについて少し書きました

これは

朝 起き上がる前に布団の中でやるストレッチです

もちろん

普段からやっていたいたいても大丈夫です

くれぐれも無理せず

力を入れすぎず 優しく 深呼吸しながらやりましょう

今回のストレッチができるようになったら

追加のストレッチがもう一つあるので
引き続きやってみて下さい

慌ただししい師走ですが 身体を大切に
今日も笑いながら楽しんで行きましょ

康鍼治療院 (www.yasuhari.com)

玄 翁

「咳嗽・せきには二つある」

せきは肺が主り

呼吸の不調の病なり

深い呼吸が出来ない故に

気は降りれずに 逆上し

コンコン ゲホ・ゴホ せきとなる

咳嗽・せきには二つあり

一つは咳のせきとなり

コンコン 声出て痰は無し

二つは嗽のせきとなり

咳の声なく痰が出る

咳は肺気の弱りなり

熱や乾きや冷えなどに

肺が負けて 息浅く

呼吸や吸気が逆上し

コンコン・ゲホ・ゴホ 咳となる

嗽とは脾気の弱りなり

胃腸を動かす脾が弱りや
栄養・湿気が停滞し
痰を生み出し 肺へと貯まり
ゼロゼロ痰ある嗽となる

肺の咳を治めるにや
首・肩・背部の皮膚温め
緊張 詰まりをほぐしつつ
背中の肋骨 動く様に
ゆったり呼吸をすれば良い
脾の嗽・痰を治めるにや
座位での頭を使うのやめて
手足を適度に動かしつつ
脇腹伸ばして 横隔膜で
呼吸ができれば 痰解消

せきは呼吸を鍛えるなり
弱い呼吸を 強制的に
コンコン せきにて強化をす
咳嗽治めりや 肺丈夫



「生き方五行 金性」

金性 金の気 金属で

地球の大地が生み出す気

外界・陽の活動の

極まり実した所から

内側・中心 陰の部へ

落とし込まれる虚の作用

金属・鉄の性の様に

陽の活動 熱により

外形・内面 変化して

陰で落ち着く 冷えにより

内外形は固まりて

変化が定着 安定す

外界 陽にて様々な

活動しながら生きる時

気持ちは高揚 動きは活発

なればなる程 熱帯びて

自分の熱で 変化する

時には周りと温度差生まれ

衝突・諍い 打つかれど

熱した金属・鉄の様に

打ちつ打たれつ 打ちひしがれりや

密度を上げて鍛えられ

落ち着く頃には 鋼の様に

岩をも砕く 強さとなる

心が冷えて 外に出ず

動きも少なきや 金の気は

形も 密度も変化せず

弱い 状態変えられぬ

何かに興味を持つたりと

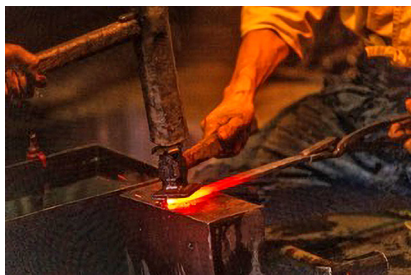
心が熱くなった時こそ

外や人との接触や

壁に当たるを恐れずに

動けば心身 鍛えられ

鋼の強さが身につくぞ



丘おかの上客舎うえほての楼台テラスに登のぼる
横山精真

昔時せきじ此この景けい愚生ぐせいを育はぐくむ

今いま聴きく飛鳶ひえんの俯瞰ふかんして鳴なくを

多少たしょうの郷愁きょうしゅう亦また秋興しゅうきよう

静波山翠せいはいさんすい自おのずから詩情しじよう

登丘上客舎樓臺 和村田氏詩韻 九月二十四日

昔時此景育愚生 今聴飛鳶俯瞰鳴
多少郷心亦秋興 靜波山翠自詩情

(語釈) 〇愚生……ここでは作者のこと。〇飛鳶……飛んでいる鳶。〇俯瞰……全体を上から見ろ。〇郷愁……しみじみと故郷を懐かしむ気持ち。〇秋興……秋のあじわいのある趣。

(通釈) 此の景色が私を育てた町、佐世保だ。今鳶が空高く舞って時折鳴いている。

改めてふる里を離れた者の気持ち、と秋の味わいのある眺めに心は満たされた。

故郷の閑かな海、山の緑そのものが詩情溢れているのだ。

※ 佐世保から帰り本部に入るとファクスが入っていた。「閑聴秋蟬・村田精流」の詩だ。

この詩の韻に和して作詞を試みた。歯科医院に行つて昼食を終える頃出来た。

恩師のご子息とは博多で話が出来、「今にして失礼かも知れないが、貴方が父を思う気持ちの深さを初めて理解できた」の言葉を戴き、春日市で恩師の墓参を済ませ、佐世保に向かう車中で試作を試みた。ホテルに着くと懇意にしているホテルマンをテラスに誘い、吟を聞いて貰った。何故か「うわー、映画を見るようだ」と彼は言つて呉れた。気を良くした私は翌朝、食事が済んで、「故郷」と題し又詩作した。テラスに居合わせた一組の夫婦に「此処で歌う事をお許し頂けますか？」怪訝そうな顔をしたが、吟じ終わると男性が「今日は私の誕生日だったんです」と言つて喜んでくれた。そんな事があつて未だ佐世保から冷めていなかった。

三名の中国語で話す夫人連が隣に座つたので、読めますか?と見せた。「ふんふん、これ李白ね。」はい漢詩です。すると別の女性が「中国では歌うんですよ」と言った。私は其れもやるんですよと、小さな声で吟じた。「これ誰の詩ですか」私です。今出来たのです。三名は「ワァー!」と言つて喜んでくれた。この三、四日の積極的な自分自身に少々驚いた。

ありがたや秋にはあきのふる里よ

of Indian propaganda, whirled through a parade of stereotypes of Kashmiris as dreaded terrorists.

I continued to look at my florist. With the practised ease of a man at one with his environment, he reached up to the tree between us, cut off a strand of willow, bound up my bouquet and handed it to me.

I'd like to believe that I was not frightened.

But my otherwise perfect morning was soured by the realisation of how effectively and imperceptibly we have all been poisoned against our fellow human beings.

時の輪廻

国内テロリストー私たち全員

2003 年、私はニューヨークを去った。9.11 の後に広がった社会的・政治的な風潮の中で、私と私の名字には“テロリスト”という色眼鏡しか向けられなかったからだ。私はインドへ移住した。少なくとも当時は、マイノリティに対する憎悪が、いまのようなレベルには達していなかった。

そんな激動の時代に、私は人生で最もロマンチックな朝を経験した。ナギーン湖を眺めながら、ゆっくり朝食をとっていた。穏やかに光をたたえた湖の静けさは、1947 年の英領撤退以降、インドとパキスタンの間で引き裂かれてきたカシミールの歴史とあまりに対照的だった。

柳の木の陰から、水辺に動く気配が見えた。シカラと呼ばれる伝統的な木の船が岸に着き、一人の男性が姿を現した。彼は、15 世紀からカシミールの人々が愛用してきた中性的な伝統服「フェラン」を身にまとい、

私の目を引くのを待ってから、花でいっぱいの船を指差した。

私は魅了され、大きな花束を選んだ。彼は器用に船の上でバランスを取りながら、花をまとめて私の方へ歩み寄った。

私の笑顔は、彼が小さなナイフを取り出した瞬間、わずかに曇ったかもしれない。戸惑いが生まれた。何十年にもわたり、カシミール人は“テロリスト”だと刷り込まれてきたプロバガンダの残響が、私の頭の中に浮かんできた。

彼は、目の前の柳の枝をひとつ切り取り、私の花束を丁寧に束ねて渡してくれた。環境と一体になったような、自然な手つきだった。

私は「怖くはなかった」と信じたい。

けれど、その完璧だった朝に影を落としたのは、私たちがいかに見えないかたちで、そして巧妙に、互いへの不信と偏見に染まってきたかという、痛烈な気づきだった。

Circles of Time

Atiya Hussain

Domestic terrorists, all of us

I left New York City in 2003, pushed out by socio-political forces unleashed after the September 11 attacks that could see little more in me, and in my last name, than a terrorist. I moved to India, where political mobilisation against minorities had not reached the levels of hatred that we have since come to expect.

It was during this turbulent time that I experienced the most romantic morning of my life. I was lingering over breakfast, looking out at the luminous Nageen Lake, its still waters a stark contrast to the beleaguered history of Kashmir that has been caught between the contesting claims of India and Pakistan ever since Britain's botched imperial retreat in 1947.



Source: <https://hoteldaressalam.com/>

In the mild sunlight filtered by a weeping willow, I saw movement by the water's edge. A shikara, or traditional wooden boat, had pulled ashore and a man appeared on the lawn. Wearing a dun-coloured pheran, the genderless traditional outfit that Kashmiris have favoured since the 15th century, he waited till he had my attention and pointed to the mass of flowers that filled his gondola-like boat.



Source: Florist's Shikara on Nageen Lake, Srinagar, 2006.
By Doniv79, CC BY-SA 2.5;
<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=22815337>

Charmed, I picked out a large bouquet. He gathered my flowers, balancing deftly in his craft, then strode quickly towards me.

My smile might have faltered when I saw that he had pulled out a small knife. I was confused. My confusion deepened as my mind, conditioned by decades

編集室だより【二〇二六年二月】

今 泉 由 利

歌集「地球にて」

海ばかり雲ばかり見る旅なれど日本へ向けて飛び行くはよろし
アルゼンチンより乗りたる私の航空券折返し点の日本に着きぬ
私の住む家というものは無けれども日本へ帰ると二人ごとを言う
海ばかり十時間見たる私の目に先ず九十九里の浜私の国
心足るというのでもなくさりげなく今日は冬色の日本に居る
天涯の孤独のごとき思案する何処に宿らむ日本の五日間
点滴の薬の匂う母の床に二夜過せりわが生れし家よ
我が肺に深く吸いたり水仙の香る空気よ父母の庭
常の日のスケジュールを共に過しつつ父母との一日たちまち過ぐ
このままがいついつまでも続けよと父母の門を出でゆく時に

まん丸の月見て眠りぬまん丸の月まだ見えて起き上る今朝
夏の国へ行きまた冬の国へゆきわが二月の終りたり

白き雲やわやわ地球を覆う時コーヒーを飲む飛行機の窓

ビシビシと音たてゆるる飛行機にもの食みている悲し哀しさ

駅コンサートあるとききて東京駅の北口近くに二夜過ごせり

エニシダの咲き始むるに弾みゆく毎日の道常の日の道

梅らしき花咲く林もスピードを落さず過ぐるカリフォルニアは

テーブルの横にテーブル椰子を置きて丸き黄の花咲き続く日々

天窓に朧に曇りて上弦の月の見えている我ハスタイム

何処よりはり着き来しかまろまろとフロントガラスに桃の花びら

前後左右ミラーに写るはみな車そのただ中に私の顔

白々と冬木の並木鈴懸並木私の車に丸き実の落つ

植物の見えぬ景色に疲れおり二万メートルよりアメリカ砂漠

遙か下方に少しばかりの雲ある日アルゼンチンへ向けて飛びゆく

カリブ海見下ろしており右の手にはドライシェリーのグラス
砂糖黍の畑の続くというキューバただ鳥影を見ているばかり
空を飛ぶ翼を持たぬに飛び出だす角度になれたり私の身体
稲妻に近づきし日も目の位置に満月ある日も私の日々

コマコマと動く性格にあらねども今年は早々8万キロ飛びぬ
わが家にハードロックの響きいてリズム取りつつ皿洗いおり

サンシユの咲く時に来たりて父母の庭に居る居る心足りつつ
何か効く漢方薬ともならむ貝母群生ふる父母の庭

細雨が降りいるが見ゆお濠の水ロスアンゼルスに傘忘れきて

一日の練習終えし子等乗せてドリアン香る我家へスピードアップ
微妙なるドリアンの味言い合いて始めての経験を二消したり

赤き実^{さき}に和みておりぬへ母カリフォルニアのこの片隅に

花咲くと声を掛け合う事もなくハカランダの花のハカランダ仰ぐ

支払いのチェックに今日はMAYと書くカリフォルニアは五月になりぬ

移りゆく季節の感じ無きままにそれでも住めりカリフォルニアに
適切に胡桃植えられ街の中にリスが住みおり人が住みおり
父の日よ母の日よと心しつつ国際電話のベルを鳴らさず

アルプスの水をアメリカで飲みてアルゼンチンの子供等と日本の私と
LAの地図に加えて日本語の本が四、五冊私の車

アメリカは自由がないと嘆き言う由野はJHスクール生

私の窓より見ゆる常の山カリフォルニア名物の今日は山火事
TELあったかとまたも問う玉由に新しきこと起りいるらし

この木あの木その向うにはブラム実る木立の見ゆるカリフォルニアなり
ひた走るフリーウェイの前方には砂漠にはあらず石漠の山

午後の日の光に向いてひた走る生きいることを紛らすごとく

窓開けることもなきまま同一の温度に暮す一年中を

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フオーレストヒルズ三〇二

ケイタイ 090・8434・8646

TEL 03・6765・5838

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。

三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和八年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行 今泉由利